



僕の大切な妹

廿日市市立吉和中学校

3年 栗栖知生

「餃子が食べたい！」

「でも、ここ階段じゃけえ芽ちゃん上げれんよ。どうする？」

「じゃあ他の店でいいよ。」

これは、僕たち家族のよくある会話です。僕たちは時々、外出先で食事をすることがあります。しかし、スロープがない場合には、諦めなくてはならないことがよくあるのです。

僕には1つ下の妹がいます。妹は、言葉を話すことも自分で歩くこともできません。

でも、最近は、僕たちが話しかけると「ああ〜。」と言ったり、手を叩いたりします。僕がだじゃれを言ったりすると、「うふふ」と笑ってくれたりすることもあります。

そんな妹が、僕は大好きです。だから、僕は妹と一緒にいろんなことがしたいです。

しかし、全てのことが一緒にできるわけではありません。

外出先でご飯を食べるとき、スロープがない場合は、先ほどのように、一緒にご飯を食べることができず、諦めなければならないことがあります。やりたいことができなかったり、家族一緒に楽しめなかったりするのとは、とても悲しい気持ちになります。

妹は、時々「でゅー。」と声を出したり、パンパンと手を叩いたりします。でも、妹は、手を叩いて音を楽しんだり、風を感じたりしているのです。

最近では静かにしないといけなことがわかるようになってきましたが、まだ、難しいです。

1年前、廿日市市のさくらびあで、「五体不満足」の著者である乙武さんが講演をされました。乙武さんは、みなさんもよくご存知のとおり、生まれつき両腕両足がありません。その講演会に僕の両親と妹が行きました。

最初は妹も静かに講演を聞いていたのですが、途中から手を叩き始めてしまいました。講演を聞いている方も、すごく気になったと思います。母は、慌てて手をおさえたそうです。

それに気がついた乙武さんは、会場のかたに、こう語りかけて下さいました。

「先程から、会場の前の方から手を叩く音が聞こえていると思います。今、お母さんが気を使われて手を押さえられましたが、彼女はそうすることで自分を表現しているのです。どうか皆さん、効果音だと思って気にしないであげてくださいませんか。」

会場からは、大きな拍手が沸き起こったそうです。

この話を聞いて、僕は、とても嬉しい気持ちになりました。それは、妹の手を叩くという行為を個性として認め、会場の方々もそれを許してくれたからです。

僕は、始めに環境の不備のため、諦めなくてはならないことがあると述べました。しかし、はたして本当にそうでしょうか。環境の不備はお金でなんとかなるかもしれません。しかし、それは本当の意味のバリアフリーなのでしょうか。

僕が乙武さんの言葉で気がついたように、僕が妹自身のことや家族の思いを周囲の皆さんに伝えることで、理解してくださる方が増えると思います。そうすれば、すべての人が住みやすい社会になると、僕は思います。

(公社) 青少年育成広島県民会議会長賞



分かり合うために

広島市立中広中学校

3年 今井 勇 太

皆さんは「いじめ」と聞き、何を思い浮かべますか？殴られる、蹴られる、集団で何かをされる、または無視をされるなど、たくさんイメージが浮かんでくるとと思います。皆さんの中には、実際にいじめを見たことがある、いじめたり、いじめられたりしたことがある、そんな人もいるかもしれません。

実は、私は中学二年生のとき、同級生の三人から毎日叩かれていました。時には、肩がパンパンに腫れ上がったこともありました。その時、私の心はとても悲しく、辛く苦しかったことを今でも思い出します。

そのころ、いじめられていることから目を背け、他のことに逃げようとしていました。私はゲームをしたりして、現実から逃げてばかりいました。このように、いじめを受け続けていると、やがて人の心は疲れ果てて、何もかもを諦めてしまい、そして、最後にはニュースでよく見かける自殺へと繋がってしまうのではないのでしょうか。

しかし、いじめている人は、いじめられている人の心がズタズタに傷つき、壊れていくことを知ることができないのです。現に、いじめていた人が、ニュースで「気づかなかった。」「笑っていたので大丈夫だと思った。」などと言っていました。

これに対して、私はとても悲しく、同じ人間同士なのにどうしてこんなにもわかり合うことができないのかと感じました。

いじめている人が、いじめられている人の心のつらさ、気持ちに気づくにはどうしたらいいのでしょうか。私は、ずっと考え続けていました。そんな中、一つの考えにたどり着いたのです。それは、いじめられている人が自分の気持ちをいじめている相手に素直に伝えるということでした。つらい気持ちを素直に伝えることができれば、いじめる人も分かってくれるのではないか、いじめを少なくできると思ったのです。

でも、いじめる人に気持ちを伝えるには勇気が必要でした。そんな時、私に決心させてくれたのは、一つの言葉でした。それは、現アメリカ合衆国大統領のオバマ氏が口にした「Yes, We can.」という言葉です。この言葉を直訳すると「私たちはできる」という簡単な言葉ですが、私の心には「誰にでもできる」と響いてきたのです。

この言葉に勇気づけられて、私はいつものように学校に向かいました。そして、叩かれた時にこう言ったのです。「痛いからやめて！」

私が自分の気持ちを伝えるたびに、叩かれる回数は少しずつ減っていき、そしてなくなっていったのです。実に簡単なことでした。自分の気持ちを伝えて、いじめをやめさせることができたのです。

中学三年生になり、私はある同級生にこのことを打ち明けました。すると、彼はこう言いました。「やられたら、反撃すればいいじゃないか。」確かに、そんな考え方もあります。十人十色という言葉の意味の通り、それぞれの人が多種多様な考え方を持っていてもおかしくはありません。

しかし、暴力ではいじめは解決しません。やられたらやり返すという方法は、新たな憎しみを生むだけです。人と人が話し合うこと、思いを伝え合うこと、それが分かり合える最善の方法だと思います。いじめは、いじめられている人の言動で変えることができると私は信じています。苦しい重いをそのまま伝える、勇気を出して。「痛いからやめて。」

広島県中学校話し方連盟会長賞



一步を踏み出す勇気

呉市立白岳中学校

3年 若 林 千 幸

「自分なんて大嫌い」そんな思いを抱えたまま過ごした日々は決して楽しいものではありませんでした。中学校一年生のころ、私のクラスは、人を傷つける言葉が飛び交っていました。「この状況を何とかしたい。」という思いを持っているのに何もできない自分がどんどん嫌になっていきました。

「お前、そんなこともできんのか。帰れや。」そんな言葉を大勢の生徒からぶつけられても、笑顔でいる A 君。私は見ぬふりしかできませんでした。私も小学生のころいじめにあったからです。プリントをくしゃくしゃにして渡されたり、育てていたチューリップが折られたり、そのことが思い出され、怖くて、何もできませんでした。彼への罵声、暴力は日に日に増して行きました。そんなある日 A 君の机を一人の子が倒したときに、彼の顔からいつもの笑顔が消えました。彼は椅子を持ち上げ、思いっきりそばにあった机に投げつけました。その騒ぎがきっかけとなり、先生がいじめに気がつきました。そして、みんなを前に話しはじめました。「いじめを決して人事だと思わないで下さい。見ているのもいじめを許しているのと同じです。」その言葉を聞いた瞬間「なんでいじめを止めようとしなかったのか。」そう自分を責めました。それから私は、彼への攻撃を止めるため勇気を振り絞って立ち向かいました。しかし、時には怖くて声を出せず何もできない自分が嫌になって、腕に爪を立て、自分を傷つけることで現実から目を背ける日もありました。

二年生になった私は「学校を変えたい。」という思いを持ち、生徒会長に立候補したいと母に相談しました。母は反対でしたが私の意志を何度も確かめた上、立候補の承諾書にサインしてくれました。

私は、生徒会長になると同時に、いじめ撲滅プロジェクトチームの一員となりました。

しかし、学校を変えるため、自分が何をしたいのか、曖昧なままでいました。「いじめがある教室に居たくなかっただけではないのか。」そんな思いの私の言葉が、みんなに響くのか。心の中で何度も繰り返しました。

教室で孤独を感じる人がいる。自ら、友達と関係を絶つ人がいる。いじめに走る人がいる。そして、いじめがあっても無関心を装う人がいる。このままでは、いじめはなくなりません。

私は、いじめを無くすためには認め合いお互いの意見を尊重しあうことが大切だと思います。そのために声高に叫び対立を生むのではなく、「授業はもちろんのこと、あいさつ運動、無言清掃、生徒会行事」など、誰もが笑顔で過ごせる居場所作りを大切に活動していきたい。そうした環境の中で仲間を信頼することが、いじめを解決できると信じて……。

私たちは、A 君からの信頼をとりもどさなくてははいけません。そして、A 君と共に皆で卒業式を迎えられるようにするため、いじめをなくすため、私は、最初の一步を踏み出します。

国際ソロプチミスト広島会長賞



平和を伝えるということ

広島市立大塚中学校

3年 水 野 亜 美

八年間…。今まで私は八年間平和についての学習をしてきました。そしてその平和学習が終わると平和学習を終えての感想文をよく書きました。その感想文の中で私は「平和を伝えていくことが、今の私たちにできること」と何度か書いていました。でも、私は自分でそうやって書いていながら、少し疑問を持っていました。「平和を伝える」って、どうすればいいんだろう…。と。

そんな私の中のモヤモヤした疑問を解決してくれた出来事がありました。それは碑前祭の後に訪れた原爆資料館での出来事です。碑前祭とは小中学生が広島から平和を訴える集まりのことです。生徒会でこの碑前祭に参加して、いつも通り終わる予定だったのですが生徒会顧問の先生が、「原爆資料館せっかくだし行ってきたら？」とすすめてくださり、みんなで行くことになりました。私は原爆資料館には小学五年生の頃平和学習で訪れたことがあっただけでこんな風に自主的に入ることは初めてでした。だからか分からないけれど少し不安でドキドキしました。

中に入ると、日本人ばかりではなく、外国の方も多く来られていました。資料にもいろいろな外国語で翻訳して書かれてありました。その資料を外国の方たちが真けんに見ている姿を見て、少し私の中の疑問が消えていく気がしました。（こうやってヒロシマから、原爆のことを世界に伝えることができるんだ。）そう思いました。

外国の方が多く来ているのを見て、少し驚きましたが、もっとビックリしたことがありました。それは小さな子供が来ていたことです。私たちが資料館の本館につくと後ろに男の子とそのお母さんがいました。子供にとってはこわいところにも関わらず、しずかに資料を見ていてとても驚きました。

本館を進んでいくと、すぐ被爆人形が置いてありました。それは、広島に、原爆が落とされた当時の様子を、被爆人形を使って、再現したものでした。皮ふは溶けて、服は破れて町をさまよっている。そんな感じでした。人形とはいえ、リアルで生々しいものに、本当に原爆、核のこわさを実感しました。

私たちが、被爆人形に、見入っていると、後ろにいた、男の子が、
「こわい…こわい…」

とこわがっていました。なだめたりするのかなあとお母さんを見ていると、男の子にこう言っていました。

「ちょっと前の日本で、こんなことがあったんよ。こわいけど本当に日本であったんよ。」

そのお母さんの言葉をきいて、涙が出そうになりました。それと同時に、私の中にあった「平和を伝える」ことをどうすればいいのか。という疑問が、確実に消えていくのが、分かりました。

家に帰り私の母にその親子のことを話すと「お母さんは自分の娘をこわい所に連れていきたくないよ…すごいねえ…」

と言っていました。それをきいて、あのお母さんの強さをもっと感じました。

私は資料館での出来事を通して、平和を伝えることは、誰にどう伝えてもいいのだということが分かりました。私もあんなお母さんのような強い人になりたいです。

これからもある平和学習。その感想で、私はこう書きたいです。

「私に子供が産まれたら、一緒に平和について考えたい。そして、これから先、私が出会うであろう人々に、広島で起こったことや平和の大切さを伝えていきたい。」

戦争は今も続いています。平和な世界なんて遠い未来かもしれません。でも、一歩でもその未来に近づく為にできることだってあります。平和を伝えるということ。それは、広島で生まれ育った、私たちの使命なのです。

広島清流ライオンズクラブ会長賞



表現をすること

三原市立第二中学校

3年 藤岡 由佳

重力に逆らって空中に浮かんでいる人。黒い布を引っ張ると現れる、色とりどりの花束。まるで最初から分かっていたかのように当てるランプの数字。ステージ上には、今までに見たことのない、不思議な世界が広がっています。二か月前、私の中学校で、マジシャンの崋助さんによるマジックショーと講演会が行われました。いつもは話を落ち着いて聞けない生徒達も、その時だけは違いました。生徒全員が目の前の不思議な光景に魅了されたのです。講演会では、マジシャンになるまでのエピソードを時にはおもしろく、時には真剣に語る崋助さん。その姿に、私はひきつけられました。それは、崋助さんの持つ豊かな表現力を感じたからかもしれません。

私は、表現をすることが好きです。きっかけは、文化祭でのスピーチ。私のスピーチを聞いた多くの人が「声がすごくきれいだったよ」「ちゃんと思いが伝わってきた」とほめてくれたからです。その言葉の一つ一つは、表現をすることへの自信や楽しさにつながっていきました。

中学校に入ってから、私は吹奏楽部でトロンボーンという楽器を演奏しています。三年生になり、最後のコンクールに向けて練習を始めた頃、私はパート練習よりも、個人練習に力を入れていました。そして、迎えた初めての合奏。一人一人の音がバラバラで、他のパートとも全く音が合いません。これではいけないと思い、パートのみんなで猛練習を始めました。二度目の合奏では、みんなの息が合って、少し上達したことを実感できました。その時、私は今までパートのみんなや全体と、一つになろうとする気持ちが足りなかったことに気付きました。

吹奏楽には、色んな楽器があり、それぞれの楽器には役割があります。私が吹くトロンボーンは、高音と低音の中間の音を出し、全体をつなげるという役割を担っています。私は、吹奏楽を通して、周りの仲間達と共に表現していくことの大切さを学びました。

トロンボーンから学んだことは、私の表現にも生かすことができます。今まで私は、ただ自分が思ったことを一方的に主張するだけのスピーチをしていました。しかし、これからは周りの人とのつながりを考えたスピーチをしたいと思います。それは、私と聞き手、聞き手同士をつなぐスピーチ。崋助さんのあの輝きは、「見ている人を幸せに、笑顔にしたい」という熱く強い思いを、マジックを通して伝えたのです。中学校最後のコンクールでの演奏。その成功は、「みんなで演奏を完成させよう」という強い願いが、楽器を通して表現できた結果です。

私は将来、表現をすることに関わる仕事がしたいです。それは、演奏で表現するのか、言葉で表現するのか、今はまだ分かりません。でもいつか、人と人とのつながりを深め、みんなが楽しくなる空間を作りたいと思います。

優 秀 賞



もっと！

府中市立第一中学校

3年 妹 尾 優 香

今が楽しければそれでいい……。授業はいい加減。部活はサボる。短いスカート。きまりは破る。一言で言うと、だらしない。それが去年までの私でした。

そんな私が変われたきっかけ。それは、ちょっと意外に聞こえるかもしれませんが、「夏休みの補充学習」でした。部活にも出ず、ダラダラしている私に、担任の先生が、「毎日午前中、学校に来て勉強しよう」と声をかけてくださったのです。「え？夏休みに？」と思いましたが、「友達と会えるから、まあいいか」と、私は参加を決めました。

朝九時から十二時まで、夏休みの宿題に取り組む。五十分勉強して十分休み。ふだんと全く同じ生活だけど、わからなかったらすぐ先生に教えてもらえるし、せっかく来てるんだからと、私は久々に、真面目に頑張りました。

それまでは適当にやったり、答えを写したりしていた宿題に、自分の力で、わかるまで取り組んだのです。試験週間より真面目に勉強しました。

そして休み明けの課題テスト。特別勉強したわけじゃないのに、今までよりいい点が取れたのです。「頑張った分は、結果に表れる。それならもっと頑張って、いい点を取ろう！」初めて勉強に対して欲が出ました。私の授業態度は、一気に変わったと思います。ムダ話をせずに先生の話をちゃんと聞く。宿題はやってくる。発表を頑張る……。すると、わかるところが増えて、やる気も増してきました。

頑張ることは楽しいー。私はちょっとずつ変わっていく自分を感じていました。そしてそのことは、私に変化を与えたのです。

二年生最大の行事、修学旅行。以前の私なら、こっそり不要物を持っていったでしょう。でも私はあの時、「今頑張ってることを台無しにしたくない」と、ルールを守ることを選びました。旅行中、私は担任の先生に、「私、不要物を持ってきてないよ！」と当たり前のことなのにアピールしました。すると先生は、「うん、えらいよ。そういうことが当たり前ができるって」と言ってくださったのです。「あー、持ってこんでよかった！」と、心から思うと同時に、当たり前のことが当たり前に行き届いている自分が、すごく嬉しかったです。

その頃、私が通う一中も、変わり始めたところでした。以前は、「一中は悪い」と言われることが多かったのに、ほめてもらうことが増えていたのです。でもその頃の一中はまだ、「当たり前のことが当たり前に行き届ける学校」ではありませんでした。

頑張ることの楽しさ、当たり前のことが当たり前に行き届ける楽しさを知った私は、「もっと頑張れること、一生懸命になれる事がほしい。そしてみんなにも、この楽しさ、嬉しさを伝えたい。一中をもっと変えたい」と思い、生徒会執行部への立候補を決意しました。

そして今、私は環境整備委員長として、生徒会活動を頑張っています。一中をきれいにするために、何ができるかをみんなで考え、計画を立てて実行する……。やるべきことがあって、それに向かって頑張ることに、やりがいを感じています。そして気づいたのです。去年までの私は不安だったのだ。「今が楽しければいい」とすべてから逃げて、でも逃げ切れずにいた。私は自分が嫌いでした。

でも今、私は頑張っている自分が好きです。変わろうとする自分、あきらめない自分が好きです。何かに真剣に向き合い、輝いている自分が好きです。だから私は、これからも頑張ります。もっともっと……。もっと！



「できない自分」と向きあう

広島市立国泰寺中学校

2年 大 越 桃 子

「やればできる」、あるいは「やってできないことはない」。こうした格言、よく耳にします。しかし、あまりにも使い古されて、もう心には響きません。そうは言いながら、「本当はできるようになりたい」、「達成したい」と願う自分がいるのです。そのくせ、実現するために努力をする段になると、「本当にできるのだろうか」、「やっぱりだめなんじゃないか」とためらってしまうのです。「こんな状態を何とかしたい。」そう思いながら、自分と正面から向きあえず、何の手立てもしないままにいる。そんな私を、ある経験が変えてくれました。

私は小学三年生から剣道を習っています。中一のとき、ある団体戦に出場しました。団体は五人一組。相手のチームに対し、三本以上取った方が勝ちです。その日、私の順番は五人目でした。そして、四人目までの結果は二勝二敗だったのです。勝敗は、五人目の私に委ねられました。

胸は激しく高鳴っていました。勝敗が委ねられたからだけではありません。対戦相手が、これまでに一度も勝てたことがない選手だったのです。「勝ちたい。しかしまた、負かされてしまうのか」。そんな思いが心をよぎったときです。次の言葉が思い出されました。「お前が勝ちたいと思う片隅で無理だと考えるなら絶対に勝てない。失敗すると考えるなら失敗する。『私はできる!』これが大切。」これは剣道の練習日誌として配られたファイルの最後に載っていた言葉です。まるで自分の迷いを見透かされているようで、特に印象に残っていたのです。その瞬間、緊張していた心が、大きく飛躍したのです。もちろんそのとき、心に浮かんだ一つ一つを言葉に直す余裕はありません。しかし何か大きな悟りのようなものが目まぐるしく頭の中を回転し、迷いを整理し、落ち着くことができたのです。「初め!」の号令の後、私はほとんど無心で「やあっ!」と叫んでいました。そして相手の一瞬の隙に、打ち込んだのです。「面あり!」。判定の声がきっぱりと聞こえました。

今、振りかえってみると、あのとき目まぐるしく頭を回転し、整理した内容とは、こういうことだと思います。「いつも打ち込みの練習のとき、『もしそれが決まらなくても自分では一本を決める気で打て』と教えられたのは、その一打に全身全霊を傾けるためだ。強く叫ぶのもそのためだ。その瞬間、迷いはない。」と。全身全霊を傾けていないから迷う。迷うから意志が萎える。「できる」ものも「できない」と思い込んでしまうのはそういうことなのでしょう。

じゃあ今まで日頃の練習では、やっていたこと、言われたことをどう受け止めていたのか。恥ずかしいことですが、惰性で練習していたのだと思います。あの試合で極度に緊張したからこそ、私の心に日頃横たわっている一種の「腰の弱さ」と、おぼろげに持っている「腰砕けの願望」とが、あの印象に残る言葉と激しくぶつかりあったのだと思います。

自信がない。迷ってしまう。こんな感覚を抱くことはこれからもあると思います。人前で自分の意見を言う。会議の採決で同調者の数に惑わされず、挙手をする。たとえばこんなことにも、自信がゆらぎ、迷う。私の弱さです。しかし、そんなときこそ、心を集中させ、状況を整理し、「できないかも」と迷う自分としっかり向きあう。あの試合の経験から学んだ、これからの私の生き方です。



私達の使命～語り継ぎたい戦争体験～

竹原市立賀茂川中学校

3年 大 内 咲

一九三八年、私の祖母は、ハワイ島のコナのお寺で生まれた。一九四一年十二月七日の朝。まだ幼かった祖母とその兄は、いつもの様にボール遊びをしようと庭へ出た。すると遠く海の向こうから何とも言えない低い爆音が聞こえ、さっきまでブルーだった空は、飛行機の大群であつという間に真っ黒に一変したという。百数十機以上もの大群が飛んでいったその直後、祖母達はラジオで日本がパールハーバーを攻撃したと知った。第二次世界大戦の幕が落とされたのだった。

祖母は私を見つめながら、次のように語った。「その夜、家中に大きな叫び声が響き渡り目が覚めたの。そこには、二人の大きなアメリカ兵が細長い銃を父に向け、まさに連れさろうとするところだったのよ。泣き叫ぶだけで私達は何もすることが出来なかったわ。後に聞くとアメリカ軍は日本人のリーダー的人物をみんな拘束したそうなの。例えば学校の先生、医者、寺の住職など。その夜の恐怖を私は今でも忘れられないのよ。」

その後祖母と兄とその母親はニューヨークに移された。そこから日本に帰るために赤十字の病院船に乗ろうとした直前、書類が一枚足りず、乗船することが出来なかった。母親は幼いこども達の目の前で、大きく泣き崩れたという。けれどもその後、衝撃の事実が知らされた。なんと病院船は攻撃されない約束になっていたのに誤って海に沈められたのだ。この時代は何か一つでも違っていたら生きるか死ぬか紙一重の時代だったのだと。もし祖母が第一便に乗っていたなら、今、この世に祖母はもちろん私も存在しない。こうして生まれ、生きている偶然に驚かされる。

祖母達はその後、第二便の病院船グリップスホルム号に乗船し、太平洋をさけ、アフリカインドを経由して、七十五日かけて無事に広島に着いた。しかし、その地で祖母はまたしても衝撃的な事実直面した。広島原爆だ。八月六日の朝、鳴りやまない空襲警報と共にアメリカ軍の飛行機が、リアカーをひく父と、幼かった祖母の頭上を、爆音と共に通り過ぎた。「B-29じゃ!!」と父がさげんだ。そして大きな灰色のきのこ雲がどんどん膨れ上がっていく様子を目の当たりにしたそう。翌日からは、ひどいやけどをおった人々が次々と運ばれてくる悲惨な情景を祖母は見たのだという。「第二次大戦の始まりと終わりを経験したことが、私の人生の歩みの全てだったね。」と祖母は言って話を終えた。

私は広島に生まれて原爆、戦争の悲惨さを学び、修学旅行で沖縄の平和についても学んできた。戦争に負けた日本は広島、長崎の原爆をはじめとする、たくさんの悲惨な思いをし、日本人こそが被害者であると私は感じていた。しかし、それは一面的な見方でしかなかった。パールハーバーの攻撃でも多くの人々が同じように傷つき、死に、それをとりまく何万もの家族が深い悲しみにおちいったに違いない。戦争は互いの国に悲惨な悲しみだけしか残さないのだと気づかされた。

昨年末、祖母の兄が亡くなった。戦争体験を知る人を毎年毎年これからも私達は失っていくだろう。だからこそ、今私達にはその事実を聞き、知り、受け継ぐ義務があるのだと思う。

今、聞いておこう、戦争を知る人達からその深い悲しみを。そして、世界の平和がこれからも永遠に続いていくように語り継いでいこう。



スーパー中学生をめざして

三次市立布野中学校

3年 小 田 知 輝

皆さんの学校の全校生徒は何人ですか。僕の学校はわずか三十五名です。多くの学校は一クラスだけでこの数を超えると思います。こんなに少ないとどんな生活だと思いますか。今から小さな学校でのスーパーな活動を聞いてください。

まず、僕は、文化委員長という生徒会執行部の一員です。ちなみに執行部は、たったの四名で、行事の企画運営、代表挨拶、生徒朝会ではパフォーマンスも披露します。文化委員会では、図書、校内放送、掲示などたくさんの仕事をこなします。特に大変なのは校内放送です。イントロクイズや心理テスト、先生や生徒へのインタビューと盛りだくさんで、準備に何時間もかかることもあります。

次に、部活動です。僕の学校は野球部、卓球部、女子バレー部となんと三つしかありません。あとは季節部として、陸上部があります。僕は、この陸上部と野球部の掛け持ちをしています。季節部といっても、練習は毎日で早朝からランニング、放課後は野球部として活動します。土・日も両方の部活に参加します。

さて、中学生といえば、勉強も大変です。近くに学習塾などなく、自分なりの勉強法で、平均九十点超えを目指しています。国語で足をひっぱられることもあります。何とかクリアするように頑張っています。

そして中三男子としては、恋の方も忙がしいといたいのですが、何しろ女子は全校でたったの十五人、この中から好みの女子にアタックし、見事に梅雨空に散ってしまいました。

その他、漢字検定、英語検定、数学検定にもチャレンジしています。さらに将棋でも一級を取得しました。

しかし、しんどい思いもありました。部活動でのことです。片方の練習に熱を入れすぎ、もう一方には力が入らず、注意を受けるようになりました。さらにその練習から逃げるようになり、おまけにケガまでしてしまいました。しんどさにきちんと向き合わず、学校に行くのも嫌になり、やっぱり両立は無理なんだ、とずいぶん悩みました。でも、いろいろな人に相談し、何とか乗り越えることができました。その結果、野球ではピッチャーで四番打者を担わせてもらい、陸上では八百メートルで県大会への切符を手にすることができました。

こうして振り返ってみると、小さい学校だからこそなしたことがあると思うのです。大きな学校では、皆の中に埋もれて先生から声もかけてもらえず、生徒会執行部なんて雲の上の存在だったかもしれません。

もちろん都会に憧れはあります。店もたくさんあって便利もよくて、快適な暮らしがそこにはあるように感じます。しかし、人口がわずか千六百人という小さな町だからこそ、僕はスーパー中学生をめざして頑張れるのです。人数が少ないことのデメリットもありますが、素敵な学校だとは思いませんか。

どんな場所にいても夢はかなえられます。これからも自分に限界を作らず、小さな学校で、大きな夢を描いて頑張ります。



命より重たいものはない

北広島町立大朝中学校

2年 栗 栖 杏 実

救急車のサイレン，回転する赤色灯，今でも救急車を見れば心臓がドキッとしてしまいます。今まで無関係だと思っていた救急車に弟が病院へ運ばれたことは，今でも鮮明に覚えています。当時，幼稚園児だった弟は幼稚園の帰りに，自宅近くの交差点で自転車に接触するという交通事故にありました。幸い，命に別状はなかったものの右足首の骨端線の近くを損傷したため，場合によっては両足の長さが異なり，普通に歩けなくなると言われました。結果的に治療のおかげもあって問題もなく歩けるようになったときには，家族みんなでホッとしたことを覚えています。

「交通事故は危ない」，「気を付けないといけない」今でもそう思っていますが，それはあくまで被害者としての意識でした。ところが今年の一月二十八日の日経新聞朝刊に，「自転車にはねられ死亡，四千七百万円賠償命令」という記事が掲載されていました。この新聞の内容は，赤信号を無視したスポーツタイプの自転車に高齢の方がはねられ頭を強打され5日後に亡くなられた，そして自転車の男性は重過失致死罪で在宅起訴され禁錮2年が確定したというものでした。この記事から私自身が加害者にもなり，場合によっては私が自転車によって人の命を奪ってしまう可能性があることに気づかされました。

私は中学校に自転車で通っています。音楽をききながら運転してはいけない，二列走行も禁止などいくつかのルールがあり，私はそれを守ってきましたが，それでも，何か考え事をしたりよそ見をしたりして運転してしまうこともあります。また，時には片手運転や手ばなし運転をしてしまったことも何度もあります。

これまで，交通事故にあわないようにと気をつけていたのは，被害者にならないようにという思いからでした。だから私は，「自転車通行可」という道路表識のある歩道をできるだけ通るように心がけています。しかし賠償命令の記事からを読んで，誰でも十分に加害者になる可能性があることをはっきりと考えはじめました。実際に私はついよそ見をしてしまい歩いている高齢者の方にぶつかりそうになったことがありました。もし本当にぶつかっていたとしたら，高額の賠償金額，いえそれ以上に被害者となった人や，その家族のことを考えると，事故を起こしてしまった後悔だけではすまされなかったと思います。

だから私は，命の重さについて考えたとき交通事故の被害者にならないようにするだけでなく，絶対加害者にもならないように気をつけることを決めました。

命より重たいものは，ありません。でも，自分の行動一つで，その命を，うばってしまうことがあるのです。「私は大丈夫」なんて軽い気持ちはすてて，色いろなことに配慮して生活していきたいです。そして自分の命も人の命も本当に大切にできる人間として成長していきたいです。



畑に感謝

広島市立白木中学校

3年 山下 颯也

僕には一つだけ、みんなに自慢できるものがあります。それは、自分の畑です。自分で耕し肥料を入れ、苗を植え付け収穫する。本物の自分だけの畑です。

三年前のことです。家の庭を工事するとき、突然父から「畑を作ってやってみるか」と聞かれ、思わず「やる」と応えたのが始まりです。「自分専用の土地、自分だけの畑」。ワクワクしました。ほんとは野球をしている弟のために、壁当てを作る「ついで」にできた空き地だったのです。でもそんなことは全く関係なく、自分の畑に夢中になりました。

一年目は小石を取って土作りからです。祖母の家から有機肥料をもらい、鍬で耕しました。この肥料は残飯と粃殻を混ぜてできる。自家製のすぐれものです。二年目から、なす・ピーマン・ししとう・ゴーヤ・トマト・トウモロコシ・かぼちゃと色々な野菜に挑戦しました。三年目の今年は、たくさんの夏野菜が収穫できて、毎日食べました。一番のお気に入り、なすを素揚げした揚げだしです。これはもう絶品です。

こうして収穫した野菜は家で食べますが、食べきれない野菜は祖母の家に持って行きます。すると「ようできとるね」「おいしかったよ」とほめてもらえることがうれしくて、さらにやる気になるのです。

しかし、今日まで順風満帆だったわけではありません。失敗もたくさんありました。ひどい雨で苗が倒れたこともあり、大雨の日は学校にいても気がかりで仕方ないことがあります。特に、ネットが低すぎて鹿に入られた時はショックでした。しかし、父も母もいっさい口をはさみません。ですすから分からないことは祖父母に聞きます。植え付けの間隔・深さ・肥料などの確かなアドバイスがもらえます。

こうして手をかけた僕の畑は近所の方から「すごいね」とほめてもらえるほどになりました。近頃は、近所の方が苗を持ってきてくれたりします。

もともと農業が好きで、小さいときから祖父母を手伝ってきました。だから見よう見まねで、たいていのことはできます。しかし、自分だけの畑を持つと、今までとは違った責任や興味がわいてくるのが分かりました。自分で言うのも恥ずかしいですが、気持ちが豊かになったというか、自分に少しだけ自信がついてイライラすることが少なくなったことです。正直、小学生の頃は、トラブルも多くて自分のことをあまり好きになれませんでした。でも今は違います。とにかく色々なことに挑戦して、体がいくつもほしいくらいです。部活の陸上・小学生を率いるよさこいチームのリーダー・地域の行事・学校のボランティアと、とにかく忙しい毎日です。でも、こうして外へ外へと活動の場を増やすようになったのも、畑のおかげです。いや、もっとさかのぼると父のおかげ。いや祖父母のおかげ。そうか、田舎に住んでるおかげかな、なんて思うようになりました。自分では普段通りに働いているつもりでも「よく気が利くなあ」「手際がいいなあ」「段取りがうまいよ」と行事のたびに先生や地域の方にほめてもらいます。やっぱり認めてもらうって、すごく心地いいし自信がわいてきます。一番は、近所のお年寄りに「すごいね」と声をかけてもらって仲良くなったこと。単純だから次も喜んでもらいたいと思って元気よくあいさつするようになりました。

ほくの畑の恵みは野菜だけではありません。勉強も生活も課題だらけの僕に、誇りと自信と積極性をくれました。これからも土の匂いをかぎながら、豊かな気持ちで過ごしたいと思います。僕を変えてくれた白木の自然に、地域の人に、畑をくれた父に感謝です。



伝統文化を守り抜く

広島県立広島中央特別支援学校中学部

2年 石 原 汐 恩

みなさんは、日本のことは好きですか。畳の部屋でのんびりくつろぐことができる生活や、だしを取って椀物を作る食文化や、チューナーを使わずに音を合わせる和楽器を奏でる芸能文化に、私は温かみを感じています。

和食が無形文化遺産になったことを知っていますか。これは大きな喜びです。でも今、「和食は味が薄いから嫌い。」

「着物はしんどいから着たくない。」などと、若い人達が日本文化に興味を示さないことが多いと思います。実は私にとっても、日本文化は身近ではありませんでした。しかし、ある出会いがきっかけで、代々受け継がれてきた伝統文化を守り抜いていきたいと思うようになったのです。

中二になって、知人から三味線を譲ってもらいました。すべてが自然の素材でできていて、「二上がり」「本調子」というように、曲によって調子を変える三味線に、私は日本の心を感じました。「チャチャン」という音は、「元気を出して」という声に聞こえて、「ボロロン」という音は、「そんなに落ち込んでいる暇はない」という声に聞こえます。三味線は音で私の心を支えてくれます。そんなとき私は、「こんないいものを考えてくれたご先祖様、ありがとう」と言いたくなります。

私は、日本の心をもっと知りたいと思うようになりました。古典文学に興味をもちました。習っている詩吟の先生にそのことを話すと、「若いあなたが詩吟の会に入り、続けてくれて嬉しいわ。」と言ってくださいました。

このような体験を通して、「私が腕を磨いて次の世代の人達に語り継がなければならない」という思いが出てきました。日本の文化は、「日本の心」を伝え残してきたからです。日本の心は音楽だけにあるわけではありません。お茶を点てて出すときには、「あなたとの出会いを大切にします」という気持ちを込めて出します。布を織るときには、四季折々の風物や景色を織り込みます。子供会でお寺に泊まったときには、「いただきます」「ごちそうさま」と、いただく命に感謝の気持ちを込めて食事をするを教わりました。

このように、日本文化には、心が宿っているのです。これからの世代がそれを知らないということになってしまうのは、残念なことです。私は、日本の伝統文化とその心を次世代へ語り継ごうと思っています。

さあ、みなさんも私と一緒に次の三つを参考に始めてみましょう。

- 一 日本を愛すること
- 二 和食を好んで食べる
- 三 日本の芸能にふれること

まずは、日本の文化に興味をもつことから始めましょう。「正座」をすることや、「畳の縁を踏まないように歩くこと」など、普段何気なくしている動作に心を留めてみましょう。そうすると、それらは、「心を大事にしろ」という声の表れだと思えてきます。心が宿る日本の伝統文化を今から継承していかなければ、いつか日本の心が消えてしまうことになってしまいます。だから私は、もっと日本の文化を知り、知識を深め、日本の伝統文化を守り抜いていきたいと思っています。